私の戦争体験記

松村明子（高野台・60歳）

昭和二十年、三月の大阪大空襲以来なぜか鳴りをひそめて敵機の偵察もなくラジオの放送を頼りの毎日、私は当時女学校四年生、父は口腔外科歯科医師を京阪国道筋で開業しておりました。他の家族は、戦争もはげしくなってきましたので、弟・妹（乳のみ子）・祖母・そして母、大阪でも北海道といわれる寒さの厳しい山中へ疎開しており、私と父だけ残り、私は学徒動員、父・救護班の医師として二人だけで過しておりました。

忘れもしない六月一日、早々になりをひそめていた空襲があり、私の母校が被災致し、その時父は母校の（私の）講堂で医師の会合をしておりました。女学校の中だけで見事に間隔をあけて十二発落下（焼夷弾）致し、内一発は衛生室の先生が焼夷弾の直撃でお亡くなりになり、内一発は校庭の防空壕に避難しておりました下級生たちの所へ落下、皆亡くなったのです。丁度まわりの街よりなだらかな丘稜地帯に女学校が建っていたのです。それこそあっという間の出来事。天井も高く英国の方の設計とかで明治時代のものでしたが、戦争には勝てず、でも三階を突き抜けて二階に焼夷弾が落ち、椅子、机が少々焼けた位で学校全体丸焼けにはならず助かりました。でもあの美しい学校が空襲により修羅場と化したのです。避難してくる者、かたや医者が多勢いるので病院になり、その日は私も心配致しました。夜更けて十一時、父は歩いて帰ってきました。父がお昼から飲まず食わずで大分疲れはてて、又憔悴しきっておりましたのを記憶しております。空襲の度に戦災孤児が出て、食糧も乏しい中、本当にかわいそうでした。学校へ登校する度にヒメムカシヨモギ（一名アメリカ草）の芯をとめないよう葉だけを採集し、沸騰したお湯に入れ、三階の屋上に干し、又それを粉にしてメリケン粉をつなぎに塩を入れ蒸しだんごを作り孤児院へ持っていったものです。若かった私は、軍需工場で日本でも最新の強烈な剛発真管（機関銃の弾）を作っていましたが、この一発が兵隊さん一人を救うと思ったものでした。

六月七日、いつものように工場へ出かける用意をしておりましたら、父が急に「ニュースで聞いたところによると、今日当たり空襲がありそうだから行かない方が良い」といわれ、そして後一回のトラックで疎開しようと思っていたピアノを心ゆくまで弾いていなさいといわれました。ピアノを弾き楽しんでいました所午前九時四十五分警戒警報のサイレンが鳴り響き、すぐ父が「今日は覚悟しよう」と申し、手伝いを頼まれました。父の大切な医薬品・医療器具等々防空壕に入れる事でした。階段の下から庭先の廊下まで新聞をしきつめて靴をはいたまま父とリレー式に動き、一生懸命に入れました。防空壕の三段の階段に空間がある事を父に申し、そこに八十糎程の振子のボンボン時計を入れ、すぐ鉄板を入口にかぶせて上に土を

のせスコップでたたきつけながら土を山に積んでいました時、空襲警報が又もや響き渡り、聞こえたと同時にお腹に響く音と共に後から強烈な爆風にのせられ、私の体が我が家の廊下まですっとんで、やっと中の柱を持ちつったっていました。戸をはずして作業していて良かったと思いました。これはやはりただ事ではない。父のいう通りと自覚し急ぎもっと土をかぶせなくてはと必死に作業をし、こうなったら新聞紙の上を歩くどころではなく、家中靴ばきで他に助けたいものはと歩きまわりましたら、キッコーマンの未使用のお醤油が目につきました。上海にいた叔母から送ってきましたアメゴムのレインシューズを持ち、裏庭にありました朝鮮鉢と当時申しておりましたのを周りを土に埋め（地上五センチメートル位あかして）それに水が満々と入っており、その中に例の二本の壜とレインシューズを入れました。リュックサックと右に防空頭巾左に防毒マスクそして首にタオル、鉄かぶとの中にタオル、腰にタオルを持って、さあ！いくぞと申した父と共に玄関へ出、「町会の壕へ行こう」と父が申し私が先に出ようとしました時、裏庭の方から先程の爆風より強烈な爆風が私達の後から襲ってアッと思った瞬間手は患者さん達がお二階へ上る梯子段の手摺りを持ったと同時に手はのび切り、父が私の肩を片手で持ち、私の体も父もまるで鯉のぼりのように横に浮き上り（観音開きの扉は左右にダダーンと音をたててひらき、）道路のコンクリートに放り出されるかと思いました。その瞬間外が見えたのですが、白く光っていて、その有様はまるで空気まで動かないでいておしだまり、別世界のようでした。体は土間に落ち、痛いなんて言っている暇もなく、さあ行こうと父にうながされてまっしぐらに町会の防空壕へ向って走りました。（たしか十五メートル位離れていたと思いますが）敵機来襲の声が聞こえましたが姿は見えず、私が先に壕にもぐり「お父さん」と声をかけ上を見ましたら頭上に焼夷弾が落下しており、思わず父の手を引っぱり壕の中へ、幸いに直撃をまぬがれ、その入口からは出られずもう一つの入口から結局一番最後に外に出たのです。先程の白々と光って街路樹の木の葉もじっとたたずんで息を凝らす状態とうって変わって、人が外に出てぼうぜんとして立っていました。エレクトロン油脂の焼夷弾がシュルッシュルッと音をたてて、油の小さなかたまりが火花となりとびちっていました。その数は数え切れない程でした。油の火花なので恐ろしく、やっとの思いで私の家の前にきました時、私の膝頭がぶるぶる震えて止めようと思っても止まらず、丁度その時後からコラーッと父の罵声、私は思わずハイといって家の前にたてかけてあった消火用の火消しを防火用水にザンブとつけ焼夷弾めがけてたたきつけておりました。明子（のりこ）そんな事しなくても良いといわれ、その時には膝の震えが止まっておりました。父が「今日ももう家も焼けてしまうから明子逃げなさい」と、私は「お父さん一緒に逃げましょう」と申しましたら、「お父さんは救護班だから先に逃げる訳にはいかない、城北公園へ逃げなさい」「自分の命を大切にしてな」と申しました。市電の通りからいけば近いので父にそのように申しましたら、市電通りは軍需工場が近いから危いから京阪国道をまわって行きなさいと、少々不安に駆られガスタンクがある事を申しましたら「空襲の時はひっこんでいるから大丈夫だよ」、と間髪を入れずさあ行けといわれ、何も言わず後をふり向かず走りました。二十メートル位走りますと、角に炭屋さんがあり俵はもえてしまいノコギリで切って使う上等のくぬぎの木の炭が真赤にいこって積まれたままの状態で炎を上げていました。そこで私は再び家が焼けてしまうと思ったものでした。その又角の産婦人科の先生の前まで行きましたら又敵機来襲、外にいたのでは危いと思い先生

宅の玄関に入りこみました。その前に防空壕に入ろうとしましたら、中から『満員よ』と言われたのは子供心にショックでしたが、すぐ思いなおして先生宅の扉が開いたままになっていた玄関に入ったのです。焼夷弾か爆弾かどちらが落ちてもと思い両足をかかえこみ、目と耳を両手でおさえてうずくまっておりました。敵機退散の声、さあ出ようと思い玄関入口まで出た時、頭も顔も上半身赤茶黒に焼けた大きなしらないおじさんが、両手を顔の横に広げられるだけ広げ、広げた手の平も焼けただれ「アツイようアツイよう先生先生助けて助けて。」前にいる私にも気がつかなかったらしく、私は驚いて後ずさりし壁の方に逃げ、私の持っている医薬品でと思ったのですが、ふと見た足もただただすごかった。これではこの薬だけでは…、父の言葉を思い出し合掌をして去りました。その時はまだ人道を通っていたのですが、いつの間にか体全体があついものですから知らぬまに八間道路（車道）の道路のまん中を走っていました。鼻の粘膜もパリパリとなる位かわき、目の中もまばたきが不自由になる程かわききり、何かのショックで顔の肌もパリッとさけるのではと思う程渇き呼吸がしにくくなりましたので、水が欲しい防火用水の水と思い、燃えている家に向かって意を決して走りました。ありました水が存分に、鉄かぶとで頭から水をかぶりそして車道の真中へ十メートルも走ったでしょうか、先程の水はすっかり渇ききり、又元のもくあみで息苦しくなり、又防火用水めがけて突進、そこには水がなく青い水苔がどろどろと底の方にあるだけ、あきらめて車道の真中にかえろうと思ったのですが、そうだあの苔の中には酸素があると思いひきかえして青い苔がなくなるまでタオル三枚にひっつけ又体にかけて、今度は青みどろのついたタオルを頭に、そして防空鉄かぶと、その上に防空頭布・防毒マスクを顔につけ、一枚の青みどろ付のタオルをマスクの中にもう一枚は首にと巻き付け、マスクの下から手を入れて目頭をぬらしたり鼻腔をぬらしたりしてただまっしぐらに車道中心を走りました。大分走りました時、そのような中、又敵機来襲になり、車道では危いと感じ家を見たのですが、前の方は家らしいのですが見えれば奥は一階と二階が一緒になった火車（しかも大きな）となりゴーと音をたてて前の方に押し寄せてくるのです。私は街路樹の下でと思ったのですが安心できず、意を決して家の軒先にたたずみ両手を合わせ家の屋根が落ちるか焼夷弾がおちるかどっちかにしてと拝みました。焼夷弾が先に落ち、すぐ飛び出したのです。フト見ますと、そこで家は終りでぺしゃんこになったガスタンクの広場でした。少しでも遠くに逃げなくてはと思い走り去ったのです。もうその頃は空襲の前の青空はどこへやらすっかり薄墨を流したような空になり、黒い雨が降り出しました。皆疲れはてて自分自身が歩くのがやっとでした。三々五々ただ黙ってうすよごれた衣服で歩いていた時、又敵機来襲。その頃の学校では外国の飛行機の爆音で爆撃機か戦闘機かを見分ける訓練をされていましたので、すぐさま艦さい機のグラマン戦闘機と分かり爆音が近くなったので走りながら（後から右側にきたのが分かり）伏せをする時右を見ました。米国人の飛行士が見えました位低空で機銃掃射をしたんです。身も心もちぢみ恐ろしかったです。前の方におられる方々を見る元気もなく公園に向って歩きました。やっとの事で着いたと思いましたら憲兵隊の方々が縄張りをして中に入れず、私は疲れはて爆撃をまぬがれた小学校へ行きました。夜通しドドーンドドーンと時限爆弾が鳴り響き、まんじりともせず夜をあかしました。

救護班に行っても父の姿はなく泣きたくなる思いでした。町会の詰所には私の近所のお寺さんの和尚さんが町会長でしたのでそこにいる事にし、

とにかく動こうと思い戦災者に配られる炊き出しのおにぎりを餅箱に入れて配りました。結局詰所の人々はおにぎりが口にできず、乾パンと水で凌ぎました。その一晩の内に和尚さんの所へは御二人の息子さんがいらっしゃったのですが（学徒報国隊）、次々と悲報が入り、でも皆の為に動いていらっしゃった和尚さんの顔を思い出します。薄明りが見え出した時私は和尚さんに焼け跡へ行って父を探しに行くと申しましたら、時限爆弾が落されているからと止められたのですが、私はいてもたっても堪らず和尚さんの言葉を押し切り大丈夫です気を付けますからといって別れ、涙を流しながら歩きました。我が家の位置が分らず困っておりましたら、ピアノのたて琴だけが横たわり皆焼けておりましたがでもまだくすぶっておりました。どうも防空壕が助かったようです。お釜はお米をといで炊けるばかりにしてあったのですが、無造作に斜め横に地面にあり勿論木のふたはなく米は真黒に炭化しておりました。元の入口の近くに1トン爆弾が横たわり思わず耳を寄せてタイムがきこえないか神経をとがらした程でしたが単なる不発弾だったようです。後から逃げた父がまだいる時におとした弾だった様です。

そのうち御近所の方々が集まってきて心が暖ったのですが、お父さんお父さんと三人娘とお母様が泣きながら探しているのです。私は泣く力もなくじっと見送りました。丁度お向いの方々軒並み主人たる方々が亡くなられたようです。その中、城北公園の方角を見て私はもしもの事があった時どうしようと思い乍ら佇んでいました。

忘れもしません。十二時の昼のサイレンが鳴った時、公園まで焼け野原で一望千里になった所へ五センチメートル程の父の姿を見つけ、歩き方がそっくりでじっと見つめておりました。次第に大きくなる姿を追っている内涙が溢れ出て困った程でした。間近になった時、父が「明子元気だったか」と言って、私は何も言えず父に抱きついていました。父は明子に公園へ行けと言ったので、その公園が余りにもひどい状態だったので一人一人検死したのだよ、中に明子に似ているのがあったので寺生まれの三男の父はお経を上げてきたそうです。防空壕は残っておりました。金魚鉢に入れておいたお醤油の壜はそのままの姿であり、助かったと胸が高なりました。水は十センチメートル位になっており、レインシューズはボタンの所がだれた具合になり、まず壜を取り出そうと思い壜の上を持ちますと音もなく手の平の中で灰になり私は目を疑った程で、半分以上くずれて中のお醤油が流れ出し慌ててレインシューズを持ち上げた程でした。もう一本のお醤油はと思いましたがそっとしておきました。これ以上焼けたり、又こわれたりするのが恐ろしくなったのです。金魚は姿もなく骨もない程でした。周りの木々も皆燃えてさぞかし少々の生き物でも灰と化した事と思います。父の幼な友達（福井県勝山市）の方からリヤカーをおかりして、防空壕の品をリヤカーにのせて夕五時頃から母達の疎開している山奥へ廿五里、二日がかり乾パンと水で歩いて行きました。途中品物を半分倉庫（といっても物置のような所）に預けたのですが、預けたお家の方に取られたようです（半分程）。とにかくどさくさに悪い事をされる方がいらっしゃるので私はつくづく考えさせられました。丁度ただ今の高一の位でしたから、人が困った時にもかかわらず平気でうそをついたり又ごまかしたりする方があるので子供心に驚き、私が大人になった時このような事は絶対にするまいと自分に誓った程でした。と共に二度と戦争はするものではないと心に誓っております。

防空壕で助かった医薬品で、終戦後の薬が手に入らない時、疎開地で父

は皆を助けました。食もなくお金もない時、農作物が物を言った時代でした。私は両親と共に、又助けて開墾をし、何事も一から始めて、嫁ぐ時には水田の稲以外のものは自給自足したものです。

食糧安保うんぬんをいわれる今日、広い心を持って将来の事も平和の中にあって考えていきたいと思います。又、人種が違っても人間の心は同じだと思いますので、話合いで世界平和を考えたいものです。

戦後の苦労は大なり小なり大変な事でしたが、人生の一時代の礎となる事と思っております。

つたない文でございますが、御判読下さいますれば幸でございます。

